

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル:「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」(平成 26 年度第 1 回研究会)

日時:平成 26 年 7 月 12 日(土曜日)午後 2 時より午後 7 時

場所:東京外国語大学本郷サテライト本郷サテライト 7 階会議室

1. 石川寛 (AA 研共同研究員、早稲田大学)

「Belvola-300 および Purigere-300 の統治の変遷について」

6 世紀から 12 世紀にかけてのデカン地方は、前期チャールキヤ朝 (540 頃～757 頃)、ラーシュトラクータ朝 (752 頃～973 頃)、後期チャールキヤ朝 (973 頃～1198 頃) と大きな 3 つの王朝が継続して広い範囲を統治支配したことによって、政治的・文化的統合が進展した。わけてもラーシュトラクータ朝第 6 代アモーガヴァルシャ 1 世の治世 (814-78) 以降のラーシュトラクータ朝後半期は、王朝統治下にあつて隠然とした力を有していた地方支配者との関係が安定化したことで、特に王国南部に著しい発展がみられた。史料からは、規模は大きくはないものの数多くのヒンドゥーやジャイナの寺院が王の裁可のもとで建立された事実が明らかとなっている。それは、ラーシュトラクータ朝支配の初期に第 2 代クリシュナ 1 世 (756-74) によって、王国北部のエローラにその権威を誇示するがごとく巨大なカイラーサナータ寺院が建立された以外は目立った寺院建設がみられなかった事実とはきわめて興味深い対照をなす。また、後半期以降は首都マーニヤケータを中心として、カンナダ文学がその発展を見せた時期でもあり、その嚆矢をなす文献で王の作に帰される『カヴィラージャ・マールガ (詩人王の道)』が、現存最古のカンナダ語による詩論として今日に伝えられている。王朝の公式文書ともいべき多くの刻文がカンナダ語で記されるようになるのもこの時期である。ちなみに、アモーガヴァルシャ 1 世に続く第 7 代クリシュナ 2 世 (878-914) 治世の刻文 42 例中 39 例がカンナダ語であり、王朝全体を通じて 500 余の刻文の 8 割強をカンナダ語のそれが占めることから、カンナダ語文化圏ともいべき地域のアイデンティティーが形成され始めたことが確実である。

Belvola-300 や Purigere-300 は、それらの南西に境を接する Banavasi-12000 とならんで多くの寺院建設がみられた王国南部に位置する重要な行政区画であった。区画の末尾に付された数字の意味については、現在よりも小さかったと考えられる村落の規模や、村落数の算定の方法など解明の残されるいくつかの課題は有するものの、本発表で取り上げた例については、区画に属する村落の数を示したものと考えてよいと思われる。(議論の詳細は、拙稿「デカン地方古代諸王朝の行政区画—主に numerical appellation の解釈をめぐって」『東洋学報』第 74 巻、第 1・2 号、1993.を参照)

Belvola-300 は、前期チャールキヤ朝の首都バーダーミのすぐ南に位置していた行政区画で、ヒエをはじめとした雑穀、綿花、サトウキビなどを多く産出する生産性の高い地域を

かかえている。中心都市（ラージャダーニ rajadhani）のアンニグレ Annigere は、現在のダールワダ県・ナヴァルグンド郡のアンニグリーである。続く後期チャールキヤ朝、ホイサラ朝の時代にも中心都市として繁栄していたことが確かめられる。また後期チャールキヤ朝の史料では、有力階層であったマハーマンダレーシュヴァラ mahamandalesvara が、この都市に寺院や貯水池などを建設していることも注目される。

今一つの重要区画であった Purigere-300 は、Belvola-300 のさらに南に位置していた。Belvola-300 と同じく現在も平坦地の広がる一大穀倉地帯を形成している。中心都市プリグレ（プリカラ・ナガラ）は現在のガダガ県・シルハッティ郡のラクシュメーシュヴァル Lakshmesvar である。プリグレも前期チャールキヤ朝時代にジャイナ教寺院が建設されて以降長年にわたって繁栄した都市である。最初のシャンカ・ジネンドラ寺院は、地方支配者のセンドラカ家 Sendraka の首長ドゥルガシャクティによって建立された。ドゥルガシャクティは寺院の管理運営のため 500 ニヴァルタナというかなり大規模な土地を寄進している。センドラカ家は先王キールティヴァルマン 1 世の妃ドゥラヴァデーヴィーの出身一族で、寄進を承認したブラケーシン 2 世（610-43）はこの妃から生まれている。王朝権力との密接な関係のもとに建設された寺院であり都市でもあったということが出来る。その後、同王朝期にダヴァラ・ジナーラヤ、アーネセツジェヤ・バサディなどのジャイナ教寺院も建立された。その運営を支える寄進の記録の中で、旅人や貧者に宿泊・食事の便を提供した付属の施設ダーナ・シャーラー dana-sala の度重なる建設と維持がその目的として特記されていることも注目される。地域の信仰や経済生活の一つの核として成長・発展を続けていったことが跡付けられるからである。

アーネセツジェヤ・バサディは、7代王ヴィジャヤーディティヤ（693-733）の妹で、Banavasi-12000 の統治を委ねられたやはり有力な地方支配者アールパ Alupa の首長チトラヴァーハナに嫁していた、クンクマ・デヴィーが建立したものである。同寺院に寄進されたグッディゲーリ村は、ラクシュメーシュヴァルの東約 10km に位置している（シッガオン銅板文書）。約 370 年後の後期チャールキヤ朝期の 1072 年にも、同寺院による寄進村落の享有を認める碑文が存在する。碑文は寄進村落グッディゲーリ（現グディゲーリ）に存するジャイナ教寺院の倉庫の壁に刻まれていて、シッガオン銅板文書の約定の通りの享有が認められている。グディゲーリの寺院が、ラクシュメーシュヴァルの寺院の傘下の支院として建立されたことは言うまでもないだろう。この地域のジャイナ教信仰の広がり在那里に認めることができる。

さらに興味深い内容を示す碑文がヴィジャヤーディティヤの治世に刻まれている。ジャイナ教信者であった可能性が高いと考えられる商人集団（ナガラ nagara）、バラモンの有力者団体マハージャナ（mahajana）などが積極的に都市の自治運営に携わったことが示されている。その詳細は既発表の別稿に譲るが、都市の諸集団と副王のヴィクラマーディティヤ（次王のヴィクラマーディティヤ 2 世、733-44）との間に取り決めがなされ、諸集団は王朝統治の一翼を担って、住民税の徴収、犯罪の取り締まりと刑罰の実施、祭事の運営

などにかかわったことが記されている。また、都市住民が上下4つの階層に分類され、税や諸種の費用を応分に負担していたことが分かって極めて示唆的である。(拙稿「チャールキヤ朝下の都市ラクシュメーシュヴァル—7代王ヴィジャヤーディティヤ時代の法規定をもとに」『インド考古研究』No.20、1999年、および、同「古代デカンの聖地ラクシュメーシュヴァル—前期チャールキヤ朝時代の事例を中心に」『東洋における聖地信仰の研究—ヒンドゥー教と仏教における聖地巡礼成立の要件』東洋大学・東洋学研究所プロジェクト、2007~2009年度報告書、2010年、所収、を参照)

以上のように、前期チャールキヤ朝からラーシュトラクータ朝、後期チャールキヤ朝へと続く時代はデカン地方の広い地域で、王朝統治の拠点としての都市が建設された。南西デカンのカダンバ朝やマイソール地方のガンガ朝下で発展した諸都市もその支配下に組み入れられていった。ラーシュトラクータ朝後半期以降は、様々なレベルの地域の有力者が中間的支配層として、地域の中核都市の運営に積極的に関与したことを示す史料が増加する。本発表で見た、ラクシュメーシュヴァルでのジャイナ教寺院の建設やその長期にわたる存続と繁栄、地域のレベルでの数多くのヒンドゥー寺院の建設もこれら中間的支配層の関与なしにはあり得なかった。それら寺院の多くは、当該地方の有力者が建立して地域の行政レベルでそれが承認され、最終的には王がそれを裁可するという形をとっている。その存在は、ジャイナ教やヒンドゥー教特に後者が王朝支配を支える支配的イデオロギーとしての性格を強めながら、諸集団を統合する地域の精神生活の中核として定着し行く過程を端的に示しているものということができよう。

なお、諸集団の上下関係やその結合の具体的様相の究明は、今後の課題としたい。

2. 三田昌彦 (AA 研共同研究員、名古屋大学)

「パンチャクラとマハージャナ—中世初期ラージャスターン・グジャラートの都市行政と集会組織—」

本報告は12・13世紀のラージャスターン・グジャラートの施与(寄進)刻文を史料に、この時代に現れる都市行政機関パンチャクラに着目し、都市集会組織であったマハージャナとの比較を通して、その出現の意味を王朝の地方統治と在地社会の変化から探ることを試みた。

刻文史料では、マハージャナは現在のラージャスターン・グジャラートのそれのような、いわゆる商人集団ではなく、司祭や職人のリーダーをも含む都市在住者エリートによる集会組織であり、都市全体による寺院などへの施与において、その拠出額や徴収額を決定して住民に遵守させる都市の代表機関であったが、周辺村落にまでその決定が及ぶことはなかったようである。他方、グジャラートでは12世紀第2四半期から、ラージャスターンでは同第3四半期より施与刻文に現れるパンチャクラは、そのメンバーの少なくとも一人は筆頭者として王の任命を必要とし、しばしばその筆頭者は王がその都市に派遣する地方長官である場合もあった。そしてパンチャクラの管轄領域は、その都市だけでなく周辺一帯

を広く含んでいた。その主要な任務は、施与刻文から知る限り、永続的な金銭や現物の施与を保証する施与文書の発給である。

大略以上のような解明点から、パンチャクラの出現を、王朝の地方統治や都市社会のあり方と関わらせて、とくに文書行政と関わらせて仮説的に説明すれば、以下ようになる。

王朝政府（あるいはサーマンタ政府）による地方統治は、12世紀まで王（サーマンタ）によって中核都市に派遣された地方長官（多くは *daṇḍanāyaka* などの武官）が、都市の代表組織であるマハージャナと交渉ないし協力することによって、行政が行われていたと考えられる。しかしこの時代、この地域では商業活動が活発化し、域内交易ネットワークが発達するとともに商人の台頭が著しくなっていく（Jain 1990; Chattopadhyaya 2012; Sheikh 2010）。そして12世紀以降、有力商人たちが中心となって都市住民による永代的施与がさかんに行われるようになると、施与文書によってその施与の永続性を保証するようになり、文書発給への要求が高まっていった。パンチャクラはこうした状況の中で施与文書の発給を主な任務の一つとして、それまでその場その場でしかなかった地方長官と在地社会（マハージャナ）との交渉・協力を、組織化して行政機関として立ち上げたものではなかろうか。この種の文書発給は在地の状況を把握した者がいなければ不可能であるし、その文書が王朝政府によっても保護されるためには、王朝側と在地側のタイアップによる組織が必要であったということであろう。

しかし、ここで言う「在地側」は、マハージャナがそうでないように、必ずしも周辺村落を代表していたわけではない。この時代のラージャスターン・グジャラートは、後代のチョードゥリーのような数十村の領域を世襲的に支配する在地領主的な存在はなお確立していないようであり、タックラやラーウタなどの称号をもつ地方統治の担い手や在地の土豪は短期間で別の氏族に変わるなど、その領域支配を実現・安定させるには王朝権力の後ろ盾を必要としていた（Mita 1996, 1999）。また、諸村の連合は数村程度のものでしかなく、村長たちの共同によって成立していたにすぎない（*talāra* の任命など）。派遣された地方長官は、広域の統治を行う上で在地領主のような存在を当てにすることができず、周辺村落にまでは直接的な支配力を持たない都市エリートに頼らざるを得なかったはずである（おそらく、マハージャナ・メンバーが流通などを通して個人的にもっていた周辺村落の村長に対するコネクションや情報、影響力などが、地方長官にとっては有用ではなかったかと推測する）。そうした意味では、この時代の地方統治（行政と徴税）は非常に不確実・不安定なものであったと言えるかもしれない。

<参照文献>

Chattopadhyaya, B.D. 2012: *The Making of Early Medieval India*, 2nd Ed., New Delhi: Oxford University Press (1st Ed., 1994).

Jain, V.K. 1990: *Trade and Traders in Western India (AD 1000-1300)*, New Delhi: Munshiram Manoharlal.

Mita, M. 1996: "Land Distribution and Kinship of the Nadol Cāhamānas: Structure of Rajput Polity in 12th-Century Rajasthan", *Journal of the Japanese*

Association for South Asian Studies, 8, pp. 25-57.

Mita, M. 1999: "Polity and Kingship of Early Medieval Rajasthan: an Analysis of the Nadol Cāhamāna Inscriptions", N. Karashima (ed.), *Kingship in Indian History*, New Delhi: Manohar, pp. 89-117.

Sheikh, S. 2010: *Forging a Region: Sultans, Traders, and Pilgrims in Gujarat 1200-1500*, New Delhi: Oxford University Press.

3. 和田郁子 (AA 研共同研究員、京都大学)

「港町と市壁—近世コロマンデル海岸における事例から—」

歴史上、強固な市壁が都市や人々の集住する町の周囲に築かれた例は、世界の各地で見ることができる。近世のインドにおいても、内陸諸都市のなかには幾重もの壁で囲まれたものが存在したことが知られている。沿岸部でも、例えばマラバール海岸では、16世紀からポルトガル勢力が活動拠点を置いた港町で居留地を取り囲む壁を築いてきた事例が見られる。これに対して、コロマンデル海岸では、1600年前後の時点で、港町には基本的に市壁は造られていなかった。本報告では、そのようなコロマンデル海岸の複数の港町において壁が築かれていく17世紀半ば以降の変化に着目し、とくにプリカット、ナーガパッティナム、マドラスという3つの港町の事例を中心に、壁の建設の経緯を紹介するとともに、その影響について検討する。

プリカットはヴィジャヤナガル王国の下で栄えた港町であった。同国の衰退に伴って交易港としての活動に陰りが見え始めていたこの町に、1610年にオランダ東インド会社(VOC)が目をつけて、ヴィジャヤナガル王の許可を得て商館を開設する。競争者の到来を警戒した近隣のポルトガル人は、この商館を襲撃してVOCの活動を妨害しようとした。しかし、VOCはこれを機に改めて王と交渉して要塞建設を認められ、建設された要塞ヘルトリア城を中心とするプリカット商館をコロマンデル海岸における同社の主商館と位置付け、以後活動を発展させていく。この時点で、ヴィジャヤナガル王をはじめとする周辺地域の政治権力者は、VOCによる要塞建設に対してとくに大きな関心を示すことはなかった。1640年代以降、コロマンデル海岸中部は相次ぐ戦乱に巻き込まれ、プリカット周辺でも次第に混乱が深まっていく。1660年代に入ると、町を囲む壁の建設を求める動きが見られるようになり、1665年によりやく市壁が造られた。その壁は十分に強固なものではなかったようであるが、他方でそれまで隣接しながら併存していた既存の町とVOCの要塞をともに取り囲むことで、両者が一体化された空間を現出した。

ナーガパッティナムには、17世紀初頭までに「ポルトガル人」の居住区が形成されていた。VOCは1642年にここを一時征服するが、当時その周辺地域を支配していたタンジャーヴールのナーヤカとの関係が悪化することを避けるため、このときは短時間で撤退した。その後、この「ポルトガル人」居住区の周りに囲壁が建設されたようである。1658年、改めてVOCはナーガパッティナムの「ポルトガル人が住んでいた壁で囲まれた町」を征服し、1680年代から新しい要塞を建設し始める。しかし、もともとナーガパッティナムではこの

囲壁の外にも人々の住む町があった。1690年にVOCはコロマンデル海岸の主商館をプリカットから移して、ナーガパッティナムを同海岸における活動の中心と位置付けた。ところがVOCには、囲壁外の町を含めてひとつの町として運営しようという意図はなく、市壁を拡張することにも消極的であった。囲壁の中と外は異なる町として扱われていた。

マドラスの状況は、これらの2つの町とはまた違っていた。イギリス東インド会社(EIC)は、1639年に貸借した当初は寒村にすぎなかったこの地に要塞を建設し、周辺地域からの人々の移住を促し、町の形成・拡大と並行して、市壁の建設が進められた。マドラスでは、居住地が拡大するとさらにその周りを取り囲む壁が造られていったのみならず、壁の建設に際しては住民からその費用を徴収するなどしており、町を自律的に運営しようとする意図も見られた。

これらの3つの港町では、17世紀半ばに相次いで町や居住区を取り囲む壁が造られていった。その背景には、周辺地域を巻き込んだ政治的変動や戦乱に対して防備を強化したいという事情があったと考えられる。しかし、それらの壁が、誰の主導で、どのような空間を囲んで造られたのか、その建設をめぐる周辺地域の政治権力者がどの程度どのような関与をしたのか、壁が建設された後の港町を誰がどのように運営しようとしたのかなどに注目すると、それぞれに異なる様相が見える。多額の費用と多くの労働力を必要とする市壁の建設にかかわる諸相の分析は、その町や周辺地域をめぐる権力構造、人間の移動、あるいは経済活動などのあり方を浮き彫りにし、港町と周辺地域の関係を問い直すために有効な視点を提供してくれるものと考えられる。このような立場から、他の沿岸諸都市や内陸諸都市を含めた各地との比較も視野に入れ、さらなる分析を加えることが今後の課題である。